

いのちをいただきます

県立中央農業高等学校 一年 小柳 那奈

今回のブロイラーの解体実習は、私の中で世界が大きく変わるような「いのちの授業」でした。

私の通う農業高校の畜産科では、一年生のときにブロイラーを育て、解体するという授業があります。

初めてブロイラーと出会った日のことは、今でも鮮明に覚えています。段ボール箱から聞こえる鳴き声、手の平におさまってしまう小ささ、そして私を見つめ返すつぶらな瞳がとても印象的でした。それから毎日ヒヨコに会うのが待ち遠しくて、朝も夕方もまっ先に鶏舎に向かいました。

三週間が過ぎて、いよいよ一人一羽ずつの管理となり、ひとつの命を育てることの重みと責任を感じました。畜産を学ぶ者として、ブロイラーも家畜として見なければならぬことは知っていましたが、私はそのブロイラーに「てばちゃん」という名前を付けました。

私は毎日、てばちゃんに会いに行つて、エサなどの管理をしました。しかし、寒さの増してきた十一月のある日、てばちゃんは死んでしまいました。先生は寒さのせいでと言っていました。私は空っぽになってしまったケージを見ることができませんでした。

次の日、私は予備のブロイラーをもらいました。今度は絶対に命を無駄にしたりはしないと心に誓いました。そしてあつという間にやってきた解体日当日。先生にと畜してもらおうという選択肢もありましたが、私は自分でと畜する方を選びました。

と畜は、今までの人生の中で一番心が痛みました。でも、この経験から多くのことを学びました。命のために命をいただくこと、そしてそのために命を育てることの大変さ……。

命の重さをひしひしと感じたてばちゃんとの二か月間と、この「いのちの授業」を忘れず、感謝してこれからも命をいただきたいと思います。

しあわせなきもち

七沢希望の丘初等学校 二年 松田 奉大

「奉くんはお父さん、お母さんがけっこんして九年目の時におなかの中に来てくれたんだよ。もう赤ちゃんは来ないのかなあと思っていたからともうれしかったんだよ。」

これはぼくが「いのちのじゅぎょう」のあとで、お母さんにぼくがおなかの中にいた時のようすをインタビューした時の答えです。そしてお父さんは、

「奉くんがおなかにいた時、お父さんとお母さんは毎日、車で小田原から東京までしごとに行っていたけど、その時はおなかの中の奉くんに、万一のことをないように、車がゴトゴトゆれないよう気をつけてうんてんしていたよ。」

と言っていました。

そのお父さんとお母さんの答えを聞いて、ぼくはなきながらお母さんをギュッとだきしめました。なぜかとい

うと、「ぼくがおなかにいる時に大切にそだててくれてありがとう。」という気もちをつたえたかったからです。そしてその時、ぼくは今、家ぞくみんなでいっしょにくらせてとてもうれしいと思いました。

じゅぎょうでは赤ちゃんがお母さんのおなかの中で、どんなふうになだまっていたのかはじめてわかってよかったです。人間のいのちがこんなふうにはじまることを知って、ぼくはびっくりしたけど、自分もちゃんと生まれてこられてうれしかったです。

じゅぎょうがおわって、これからも家ぞく三人でなかよく元気にがんばっていききたいと思いました。

みんなに、「ありがとう」

横浜市立磯子小学校 二年 吉澤 優晴

生活科で「ありがとう、こんなに大きくなったよ。」の学しゅうをしています。お母さんやお父さんから小さいころの話をたくさん聞きました。

ぼくは八月二日に生まれたけれど、本当は七月二十八日に生まれるよていだったそうです。生まれた日はよく晴れた日で、ぼくは十人ぐらいの中で一ばん大きな赤ちゃんだったそうです。一ばん大きな声で、一ばんよくねていた赤ちゃんだったとお母さんが話してくれました。とてもうれしい気もちになりました。

ぼくが三才の時、弟がしんでしまって、お母さんはずっとなっていたそうです。とてもかなしくて色んな人が来てくれるたびにないてばかりでした。ぼくは、そのたびにお母さんの頭をなでて、それでもないているお母さんに弟がしんで三日目、

「いつかお母さんのおなかに帰ってきてくれるから大じ

ょうぶだよ。」

と言ったそうです。

お母さんは、生活科の学しゅうカードに、

「お母さんはゆうせいにたすけられてばかりだけど、その時が一ばんゆうせいのやさしさとたくさんのパワーをもらった。」

と書いてくれました。

でも、ぼくは、お母さんやお父さんに色んなことを教えて、そだててもらって、「ありがとう」という気持ちでいっぱいです。

お母さんは、今のぼくについて、

「弟や妹にすごくやさしい。」

と書いてくれました。友だちは、

「音読やダンスが上手だね。」

と、書いてくれました。

ぼくも、家ぞくや友だちのことが大好きです。お父さんやお母さんのようにやさしいことばを言える人になりたいです。

「一生の思い出」

県立中央農業高等学校 二年 渡邊 彩香

最初に先生方から修学旅行先は東北だよと伝えられた時は「えっ、嫌だな」と思っていました。しかし、実際に被災地の建物の骨組み、瓦礫の山を見て衝撃を受けましたし、涙が出そうになりました。私が見たニュースの映像とは全く違う物を見た感じでした。

修学旅行の目的でもあった被災地に行き被災者の人たちと一緒に時間を過ごすというプロジェクトでした。

このプロジェクトに向けていろいろ準備をしていきこれが実際に開始して初めて被災者の方々とお会いして緊張しましたし、どういう事を話したらいいのかなど最初は戸惑っていました。ですが、同じプロジェクトの人たちが事前に用意したフラワーアレンジメントをしたり、軽音楽部の演奏などを一緒に見たりしていく中で自然と会話をすることができました。その中で特にお話ができなかった年輩のご婦人の方をプロジェクト終了後、近くの仮設

住宅まで私だけが送ることになりました。その方から「次はいつ来るの?」と聞かれた時に私は正直な事は言えず、「日程は決まっていけないけどまた来ます」と優しい嘘をつきました。そして最後に年輩のご婦人の方から「普段、人には言わないんだけど本当はね寂しいの」と言われた時の顔、言葉は今でも忘れられません。その言葉を聞いて私は泣いてしまいました。津波が奪っていったのは物だけではなく人の心だと思いました。私は何の言葉も返すことができませんでした。

この体験を通して将来の夢である看護師に絶対になり、体のケアと共に心のケアとして優しい言葉をかけられる看護師になってやると強く思いました。本当にこの体験は一生心に残ると思います。この企画を提案してくださいました先生、本当に感謝しています。私が目指す看護師像が定められたことに。私が思い描く看護師像になれるよう日々学び、努力をしていきたいと思えます。

しぜんもかぞくの一人

茅ヶ崎市立汐見台小学校 二年 北郷 知慧

わたしは、生活科のじゆぎょうでいろいろなことを学んできました。松の子のことが心にのこったので、松の子のことを書きます。

ある日、なぎさ公園で松の子のたねをもらって、みんなウキウキしながらうえた。松の子のかんさつをした。ようち園生の小さな松の子がはえてきた。それを見た時、こんなふうにはえるんだとびっくりした。すこしずつ大きくなって、松の子と会話をするようになった。そうして詩を書いた。そうやってみんなで大切に松の子をそだてていった。

またある日、みんなの松の子を食べに、ふしぎな虫がやってきた。どんどんみんなの松の子を食べていく。みんな大あわて。でも、クラス全員で力を合わせて虫をたじじした。そして、どんどん松の子と仲よくなって、会話も松の子のことばが、今までよりもっとわかるように

なった。

そこまで仲よくなって、自分の松の子に名前をつけた。わたしの松の子の名前は『ふすは』です。「ふ」は太く、「す」は、は先がするどい、「は」は、は先がじょうぶです。いみのある名前を考えたからには、もう自分の新しい子ども。だから、それなりにわたしは『ふすは』をかわいがった。

そしてある日、『ふすは』に
「これからも一緒にがんばっていこうね。いっぱいお世話するから、いっぱい元気にぐんぐんそだってね。」
ということばをとどけた。すると、

「もちろん。」
と『ふすは』は、こたえてくれた。そのことばは、『ふすは』が大人になるまでずっとつたえていきたい。

こんなに仲よくなったのだから、これからもずっと仲よしのまま一緒に大きくなって成長していきたい。松の子もかぞくの一人です。松の子、だいすき。

いままで習ってきた総合

大和市立中央林間小学校 五年 佐藤 瑠香

私は命について学んできて、命を形にするという授業が心に残っています。その授業に参加して、私は、みんなの命の形はちがうなあと思いました。みんなの絵を見て、色も形も大きさもぜんぜんちがうと思いました。同じ課題をやっている、同じ絵はないんだあとと思いました。私はそれと同じで、命もそうだと思います。

ほかに、心に残っている授業はいじめの授業です。なぜなら、私はこの授業を受けて、

「私は、傍観者にもいじめの側にもならない、先生にはつきりいえる人になろう！」

と思いました。いじめをされている人は、毎日がいやな気持ちだと思うから、私はそう思っている人を、いじめから救いだしたい。あと、未来には、いじめられている人がいないというふうにしたいです。いじめは、いじめられている人を死にまでせまる、命にすごく関係のある

ことです。いじている人は、おもしろがってやっているかもしれないけど、私はその人たちのことが許せません。だから、いじめは、命に関わることだし、絶対私は許せません。他にも命について学んできて、命はとても大切で、みんなと一緒にいることで、命、心が育っていくことだとこの授業で学びました。

私はこの学んだことすべてをわすれずに、この作文に書いたことを有言実行できればいいなあと思いました。

「自分にできる事」

大磯町立大磯小学校 六年 相馬 理那

「自分にできる事」って何だろう。私は、命の大切さを学んだ上でこう考えました。「自分にできる事」震災や大雨などの災害に対して感情を持つ事だろうか。それとも、自分が傷つけられぬようひっそりと暮らす事だろうか。

私は、このような二つの意見は間違っていると思います。私が考えた「自分にできる事」とは、もつと身近にある小さな努力をする事だと考えます。理由は、実際に行動に移さないと意味がないと思うからです。今を生きているからこそできる、ゴミ拾いではないか。今を過ごせるからこそ明日ではないか。そう感じたからです。

私が細谷先生の講演会を受講して命の大切さについて学んだ事は他にもたくさんあります。その中でも、一番身近に感じた事は、「自分の発言に責任を持つ」という事です。発言という単語の意味を辞書で調べてみると、意

見を述べる事。また、その言葉」と出ています。当たり前だと思う人もいると思いますが、この結果について私は、あたり前だけとても重要な事だと思います。例えば、自分にとって大切な人に「消えて」とか「嫌い」などの傷付く言葉を言われたとします。その時あなたは嬉しいですか、悲しいですか。当然、嬉しいと感ずることはないと思います。

このように、最初に述べた災害に対して感情を持つという事は悪い事ではないと思います。しかし、そのままで終わらせるのではなく、その災害で亡くなられた方々の死に恥じないよう、これからは「自分の言葉に責任を持つ」事はもちろん、「最期、後悔しない」ようにこれからの人生を生きようと決心しました。

細谷先生の講演会から分かった自分のちっぽけさも、今を生かされているありがたさも、私にとって大変良い学習、さらに良い経験となりました。

「逆境の命」

川崎市立野川中学校 一年 堀内 敬裕

命つてとても弱く、脆い。でも、暖かい。授業を受けてそう思いました。

今回の授業は、二〇一一年の東日本大震災の時に投稿されたツイッターの「つぶやき」を題材としたものでした。先生がつぶやきを読み上げていく中、私は驚きや哀れみ、なんとも言えない気持ちたちが心の中に湧き上がってきました。津波に丸ごと呑まれた町、支援物資を待つ人々の姿、それでも協力し合い支え合う「生きよう」という強い気持ち。それらがそこにはあったのです。

つぶやきの中に、このようなものがありました。

『歩道橋の上に逃げました。一緒に逃げた人達が周りを囲んで暖めてくれた。自分の着ている上着を脱いで赤ん坊にかけてくれた。おかげでこの子も無事でいられたんです。』津波から逃れたお母さんの話です。私は読んで感動しました。自分を犠牲にしても赤ん坊を暖める。

そんな自己犠牲や助け合いに圧巻でした。周りの人達は、おそらく知らない人ばかりだったと思います。それでも、協力して一つの幼い命を救おうとする。人って凄いな。そう思いました。

東日本大震災は多くの犠牲が出ました。放射能で汚染され、物資も家も無くなりました。しかし人々はこんな時でも、こんな時だからからこそ、希望を失わずに励まし合いました。震災は心の底の強い力も呼び覚ましてくれたのではないのでしょうか。

今回の授業は、考えさせられることがたくさんありました。逆境に負けない協力、愛、強い心。そして失われてしまった大切な命も絶対に忘れてはいけなとおもいました。

最後に、こんなつぶやきが心に残りました。

『いつか自分の子供や孫に話そう。「私が若かった時、東日本大震災があつて、世界が一つになった。みんなが一つのために必死になって支え合って輝いていたんだよ。」って。』

今の幸せに感謝

神奈川大学附属中学校 二年 折原 由真

人は人から生まれる。当たり前のことだが。私はとても不思議に思う。命の中に新しい命が宿るなんてできるのか。幼い頃はそう思っていた。その上人間のかたち、もちろん骨だつてあるのに母親は産んでしまう。これを不思議に思っていたのだ。

私達の周りには、いわゆる健常者が大勢いる。私もそのうちの一人だ。無事に生まれてくる人がほとんどではないのか。講演会を聞くまでの私はそう思っていた。

ところが豊島先生の話に出てくる病院では多くの新生児が入院している。生まれつきの病気を持つ子どもや上手く母親の体から抜けられなかった子ども。病院のベッドは常にいっぱいであった。中には生まれてすぐになくなってしまう子どももいた。この事実になかならずとも私は衝撃を受けた。それほど命を生むということは簡単ではなかったのだ。

新生児集中治療。そこで病氣と闘う赤ちゃんはとても痛々しかった。その小さすぎる体のどこに力があるのだろうか。そう感じてしまうほど新生児は小さかった。医者もできる限りのことはするが、やはり最後は自分が頑張るしかない。それも、物心なんてついていない子どもが、頑張れた子どももいれば頑張れなかった子どももいる。必死で生きようとしているその姿に深く感動を受けた。また、ただただ見守る事しかできないであろう両親のことも考えると、自然に目が熱くなってきた。

普通に生活することが当たり前だとは思わなくなった。私たちは、命を授かり様々な人の助けの中で無事に生まれることができたのだ。今を幸せに生きていることに感謝である。新生児であるのに病氣と闘っているのだから私たちはもっと大きなものと闘えるはずだ。いや、闘わなければならない。そう思わせるような講演会であった。

「生きる」を考える

神奈川大学附属中学校 二年 森 健太郎

「生きる」とはどういう事なのだろうか「命の授業を受けて、私が抱いた疑問がこれである。この世に生を受けてから十四年と五ヶ月。生きるこの概念について考えたことはなかった。

例えば、幸せである事、笑いながら過ごす事ができる事など、人生とは楽しいものであるという意見を聞いたとしよう。ビデオを見るまでの、「生きる」とは当然生まれてから死ぬまでの時間を過ごすことだと思っていた私にとって、この考えを受け入れる事は到底できない。仕事をして食べて寝るだけの人生、生きることがつまらないと言う人がいれば、生きる事に疲れたと言って自殺してしまう人もいる。もしか、生きることが楽しい事なのであるならば、「つまらない」「疲れた」などという感情を抱く人は誰一人としていなくなると思うからである。

命の授業で見たビデオでは、この様なものがあつた。

長い間欲しかった子供をやつと授かつて、早産による未熟児。生まれてすぐにNICU（新生児特定集中治療室）に入り治療を受けたが、意識障害が残ってしまった。

私はこの両親がとても気の毒に思えたが、最後に母親が発した言葉には驚いた。「この子と一緒に過ごしてこの子が成長するのを見てみると、自分の中にいる弱い自分も成長している様な気がする。この子と成長できるのはつらい事も沢山あるけど、うれしいです。」

これを聞いた時、私は「生きる」という事に対する考えが一変した。生きるとは、痛く、辛く、悲しく、悔しいといった感情の中でも幸せを見出し、そこに向かって歩き続けること、そうして人生の中に自分なりの価値を見出すことなのではないか、と。決して楽ではないこれからの私の人生において、待ち受ける壁の前で立ち止まったとしても、その度に幸せを見出し、どんな壁でも越えていける自分になりたいと思った。